

伝道者アウグスティヌス —洗礼志願者に何を語ったのか—¹⁾

本 城 仰 太

1. はじめに

古代教会や古代教父の包括的な「伝道者論」を論じることは至難の業である。古代において「伝道は、教会の礼拝の場で行われたのではなく…台所や店先、市場などで行われ…無名のキリスト教徒たちによる証しによって」²⁾なされたと言われている。また「初代のキリスト者の伝道活動は説教だけに限定されていなかった。教会の在り方、姿勢、また礼拝、交わり、奉仕などにおいて、教会がしようとするもののすべてを内側から支え、またそのすべてに関係していたことが伝道だった」³⁾とされている。したがって、キリスト者の誰もが伝道者であり、教会の敷居を超えたところでも伝道がなされていた。このような事情があるため、古代教会の包括的な伝道あるいは伝道者を論じることは不可能である。

そのため、本稿では論じる範囲を限定するために、ヒッポのアウグスティヌスの洗礼前教育に関して取り上げる。洗礼前教育というのは教会の中に入ってきた者が、いよいよこれから洗礼を受けてキリスト者になる直前になされる教育である。教会の外では至るところで伝道がなされていたのに対し、教会の内では驚くほど閉鎖的であった。そういう閉じられた空間でなされた古代の洗礼前教育に関しては、知られているようであり知られていないのが現状と言える。例えばどのような史料があるか。最も有名なのは『使徒伝承』(*Traditio*

Apostolica)であろう⁴⁾。この史料を軸にして受洗へのプロセスを再構成すると、以下ようになる。

「神のことは聴くために初めて来る人は全会衆が入ってくる前にまず教師の前に導かれて、信仰を求めて来た理由を尋ねられる」⁵⁾。職業の吟味もなされた⁶⁾。例えば、異教にかかわりのある職業に就いている場合、その職業を辞めるまでは求道期に入れないとされる厳格なものだった。ひとたび求道期に入っても、すぐに洗礼を受けられるわけではない。古代教会の全般的な求道期を論じているユングマンは「この三年間は、元来体系的な教授期間ではなく、むしろ道徳的吟味や試しの期間であり、ふさわしい教えをともなった、一種の宗教的かつ修徳的な修練期間」であり、「求道者には、教会共同体の礼拝における聖書朗読と説教にあずかる権利があった」と述べている⁷⁾。

このような少なくとも三年に及ぶ求道期を経て、次の段階へと進むことになる。ただし、「期間で判断されるのではなく、その人の生活態度によってのみ判断される」⁸⁾とあるように、生活態度に関する「試験を受けなければならなかった」⁹⁾。洗礼の日は「復活祭の日」¹⁰⁾が圧倒的に多かった。ただし、復活祭以外にも「聖霊降臨…すべての日が主の日なのであり、すべての時間、すべての時期が洗礼にふさわしい」¹¹⁾とテルトゥリアヌスが述べているように、復活祭しか認められないわけではなかったようである。

洗礼に至るまでの期間にも、様々な準備がなされた。『使徒伝承』では詳しく述べられていないが、信条のレクチャーがどの地域の教会においてもなされた。「信条と『主の祈り』の復唱は、すべてのキリスト者の朝の祈りの冒頭と晩の祈りの結びに行われ、中世全体を通して実行された」¹²⁾。その他にも「悪霊の追放…からだを洗い清める…朗読と教話」¹³⁾がなされ、洗礼直前にも西に向けて悪魔と決別を誓う儀式がなされた¹⁴⁾。そして、実際の洗礼式では、司式者が父・子・聖霊に関する三つの質問を投げかけ、その質問に対して「私は信じます (credo)」と三度答え、水に三度浸された¹⁵⁾。

以上が『使徒伝承』から再構成することができる古代教会における洗礼までの流れである。ただし、注意しなくてはならないのは、『使徒伝承』が特定

の時代の特定の場所の祭儀を表したものだとは言えないことである。ローマのヒッポリュトスが『使徒伝承』を215年頃に執筆したことは知られているが、ある写本（ヴェロナ写本）がそれに結び付けられ、20世紀中頃まではヒッポリュトスの『使徒伝承』のテキストであると受け入れられていたが、今やこの説は覆されている。この写本の研究が進んだ結果、その中には3世紀のローマだけに限定されない複数のルートがあり、20世紀末にはヒッポリュトスの『使徒伝承』は未だに失われているという結論になってしまった¹⁶⁾。したがって、『使徒伝承』と思われる写本には、古代教会の全般的な洗礼までの道のりが示されていると見なすのが妥当である。

それでは、時代や場所が特定できるものはないのか？ 二つを挙げることができる。一つはエルサレムのキュリロスである。350年頃のものと思われる『教理講話』（*Catechetical Lectures*）はエルサレムの司教キュリロスによって、コンスタンティヌス帝によりエルサレムのキリスト墳墓の上に建てられたアナスタシス聖堂において行われたものである¹⁷⁾。『教理講話』の全体は24講話から成る。その構成は次の通りである。初めに、序（プロカテケーシス）が来る¹⁸⁾。これは、これからいよいよ講話を受けようとしている者たちに対するインストラクションである。続いて本論部分の18の講話が続く¹⁹⁾。その中核は、講話6-18より再構成される「エルサレム信条」の注解である。そして最後に5つの講話（ミスタゴギア）で閉じられる²⁰⁾。これは洗礼の直後になされる講話であり、今、受けた洗礼のこと、そしてこれから受けようとしている聖餐のことを秘儀として説き明かしているものである。序（プロカテケーシス）はこのように始まる。「み光を受けかけているあなたがたには…あなたの名前を登録しました（'Ονοματογραφία）」²¹⁾。これまでは「求道者（κατηχούμενος）」²²⁾と呼ばれていた者たちが、洗礼志願者へと名前が登録され、この講話の序（プロカテケーシス）を受けているのである。「求道者」だった頃の詳細は分からないが、受洗志願者としての登録、本格的な洗礼への準備、エルサレム信条とその告白、洗礼直後の講話も含めた一連のプロセスが示されている²³⁾。350年頃のエルサレムでの洗礼直前と直後の様子がはっきりと分かる貴重な史料である。

東方のエルサレムのキュリロスに対し、もう一つ、時代や場所が特定できるのが、西方のアウグスティヌスである。アウグスティヌスの多く残された著作から、ヒッポでの洗礼前教育を再構成するのに十分な記述がある²⁴⁾。アウグスティヌスの洗礼や聖餐の一連の説教は、エルサレムのキュリロスのようにひとまとめに残されていないため、再構成は難しいが、彼はしばしば説教、書簡、著作、その他の言及でその祭儀のことを様々に語っているため、部分的な再構成は可能である²⁵⁾。本稿ではまずこのアウグスティヌスのヒッポでの洗礼前教育がどのようなものだったかを明らかにする（2節）。

その上で、アウグスティヌスが受洗直前の者たちにどのようなことを語ったかに触れていく（3節）。とりわけアウグスティヌスが伝道者として責任を負ったのが、洗礼式の直前に行われる「信条の伝達」と「主の祈りの講話」である。「信条の伝達」に関しては、アウグスティヌスの『説教』の中からいくつか取り上げるが、『説教』213の全訳を『神学』86号に掲載したので参照していただきたい²⁶⁾。また「主の祈りの講話」は『アウグスティヌス著作集』21（教文館、1996年）の中に4つのものが収められている。「伝道者」アウグスティヌスが「福音の担い手」として、受洗直前の者たちに何を語ったか、明らかにしていきたい。

2. ヒッポでの洗礼前教育

アウグスティヌスが司教だった頃のヒッポ教会において、「求道者」が洗礼に向けて歩むプロセスはどうなっていたのだろうか？ アウグスティヌスが残してくれた多くの史料から、ある程度の再構成が可能である。本節ではそれらの一次史料、およびいくつかの二次史料から再構成を試みたい²⁷⁾。

『教えの手ほどき』（*De Catechizandis Rudibus*）という著作がある²⁸⁾。日本語のタイトルはこのように付けられているが、英語のタイトルは *On the Catechising of the Uninstructed* として知られているように、その意味は「未教育者たちへの信仰教育について」である。本書は399-405年頃に書かれたと思われ²⁹⁾、アウグ

スティヌスの司教職の前半期から後半期に差し掛かったところで書かれたものである。執筆のきっかけになったのは、カルタゴの助祭デオグラチアスの要請である。キリスト教徒になろうとして初めて教会に訪れた人々に対し、キリスト教の信仰についての手ほどきをどのように行なうべきかの教を請うた³⁰⁾。その求めにアウグスティヌスは喜んで応え、その手ほどきのための心構えと、どのような「話」(narratio)をすればよいか具体例を示している³¹⁾。アウグスティヌス自身も「わたしも、自分に満足 of いくような話をしたことは、ただの一度だってありません」³²⁾と述べた上で、このようなアドヴァイスをしている。「いちばん重要なことは、教理を教える人が喜びの心を持って教えるにはどうすればよいかということです。その人のことばは、その人の持つ喜びに比例してじょうずなものとなるからです」³³⁾。

アウグスティヌスのこのアドヴァイスに示されているように、当時の北アフリカのカルタゴやその周辺では、洗礼への道はまず助祭からの手ほどきを受けるところから始まった。第一段階は「入信の表明」であり³⁴⁾、求道者として受け入れられるように、その担当者に申し出るところから始まった。洗礼の最終的な責任は、かつてテルトゥリアヌスが「司教が最高の権限を持っている。それに続くのは、司祭と助祭である」³⁵⁾と述べているように、司教が負っている。しかし、カルタゴのような大都会では、司教は自分で未教育者への教育に携わるほどの時間的余裕はなかったと思われ³⁶⁾、ヒッポはカルタゴほどの大都会ではなかったが小さな町ではなかったため、アウグスティヌスも実際に携わることはほとんどなかっただろう。彼が『教えの手ほどき』の中で披露した一連の「話」(narratio)は未教育者に対して彼自身が実際に語ったものである可能性があるが、アウグスティヌスの残された史料のほとんどは受洗直前の志願者たちへの説教や講話であるため、彼自身は最終段階の部分を担当し、第一段階は助祭に任せていたものと思われる。

そのような助祭による最初の手ほどきが終わると、次の段階へと進んでいくための儀式を行う。その儀式について、アウグスティヌスはこのように述べている。

これらのことを述べてから、これらのことを信ずるかどうか、また、遵守しようと思っているかどうか、研究者に質問してみなければなりません。研究者が肯定するなら、典礼の儀式に従ってかれに十字架のしるしをし、かれを教会のならわしに従って取り扱わなければなりません。研究者の受ける塩の儀式に関して、まず、神のたまものはたしかに見えるしるしで象徴されるが、それらを行なうときに贅えられるのは見えないたまものであるということと、そのために祝別で聖化されたこの塩をふつう一般に使用されている塩と同じように考えてはならないということを説明しなければなりません³⁷⁾。

二つの儀式とは一つは「十字架のしるし」であり、もう一つは「塩の儀式」である。「十字架のしるし」とは、キリストが悪魔の隷属から救い出してくださり、神の子としてくださる「しるし」のことであり、まだ洗礼を受けていないものの、教会への所属を表し、しかもこの「しるし」を公然と人前にかかげて生活していくことである³⁸⁾。「塩の儀式」とは、罪から来る悪臭と腐敗を消すことを意味し、また、求道者の生活の中で聴いた教えが塩の役割を果たすようにとの願いが込められてなされるものである³⁹⁾。

ここに出てくる「研究者」と訳されている言葉は原文では「彼」であり、本書のタイトル (*De Catechizandis Rudibus*) にもなっているように、助祭のところに来た *rudis* (未教育者) のことである。この儀式の後にはもはや *rudis* (未教育者) ではなく *catechumenus* (求道者) と呼ばれる。求道者はすでに洗礼を受けている者たちとともに通常の礼拝で聖書朗読や説教を聴き、詩編歌を歌う⁴⁰⁾。アウグスティヌスが「求道者、もしくは聴聞者と言われる…」 (*catechumeni, vel audientes vocantur*) と語っているように⁴¹⁾、通常の礼拝で聖書朗読や説教を聴くことが求道者のメインの務めになっていく。そしてもちろん礼拝の最後で行われる聖餐からは遠ざけられた⁴²⁾。

先に述べたように、このようにして始まった求道期が三年ほどに及んでから

洗礼を受けるということが一般的であった。ところがミラノ勅令によるキリスト教公認（313年）や国教化（391年）により、三年という幅が緩和される傾向があったとされる⁴³⁾。全体の流れとしてはそういう傾向があったと考えられるが、しかしなかなか洗礼を受けようとしなない信徒をアウグスティヌスが説得していたり⁴⁴⁾、逆にふさわしくない者は洗礼を遅らせるようにと言ったりしていることから⁴⁵⁾、そんなに単純に洗礼を受けられるものではなく、受洗の可否は慎重に判断していたことがうかがわれる。

このような求道期を経て、いよいよ洗礼を受けることが認められると、もはや catechumenus（求道者）と呼ばれるのではなく competentes（志願者）と呼ばれるようになる（原意としては「共に願う者」）。志願者は四旬節の初めに集められ、最終的な洗礼のための準備に取り掛かった。この期間は、志願者は人々の注目の的で、教会では人々の目につきやすい位置に席を占め、受洗準備がなされていった⁴⁶⁾。アウグスティヌスはこの期間に様々なイメージをもって志願者たちに語りかけた⁴⁷⁾。その中に一つ、洗礼式への主な手順の要約として、パンを焼く印象的な手順を示している。

小麦を挽いて水で湿らせない限り、パンと呼ばれるこの形になるのは不可能です。同じように、断食の謙遜と悪魔祓いの秘跡によって、あなたがたも練りこめられたのです。その次に洗礼が行われ、あなたがたはいわばパンの形になるために水で湿らされたのです。しかし火で焼かれなければパンにはなりません。火は何を表すのでしょうか？ それは油注ぎであり、聖霊の秘跡なのです⁴⁸⁾。

アウグスティヌスがここでパン焼きのイメージで語っていることから分かるように、手順としては「断食」「悪魔祓い」「洗礼」「油注ぎ」である。もちろんこれ以外にも、志願者は一連の流れで多くのことを体験していくことになる。

志願者は毎日午後三時まで断食をし、肉、ぶどう酒、入浴、性的関係を絶つた⁴⁹⁾。また、毎日、礼拝に参加し、説教を聴いた。アウグスティヌスはこの期

間の説教として、教理的にも道徳的にも整えられる必要があることから、両方に関心を寄せている⁵⁰⁾。教理の最終的な段階として、復活祭の二週間前から「信条の伝達」(traditio symboli) がなされた。そしてその一週間後、つまり復活祭の一週間前に「信条の復唱」(redditio symboli) がなされた。ヒッポでの「復唱」がどのような形でなされたのか、実例は示されていないが、アウグスティヌスはローマでの実例を示しており⁵¹⁾、「信条の復唱」の西方での最初の証言である⁵²⁾。四世紀後半や五世紀には、ヒッポを始め、信条の「伝達」と「復唱」の実践がラテン教会のかなりの部分に広がっていた⁵³⁾。また、「信条の復唱」のタイミングで、「主の祈りの講話」がなされた(アウグスティヌスが実際に行った「信条の伝達」と「主の祈りの講話」の内容については次節で触れる)。

受難週の木曜日に、志願者は断食を止め、断食期間中は控えていた入浴をする⁵⁴⁾。受難日の金曜日には詩編第22編や福音書の受難の朗読を聴いて過ごす⁵⁵⁾。土曜日の夜から日曜日の朝にかけて、いよいよ洗礼式が執行される。洗礼式の前には改めて「信条の復唱」が行われた⁵⁶⁾。また、洗礼式の直前には「悪魔祓い」がなされたが⁵⁷⁾、これについてはどのような形式で行われたのか、アウグスティヌスはあまり詳細を語っていない⁵⁸⁾。詩編42編(ラテン語版では41編)の賛美とともに、志願者の行進と洗礼の司式の聖職者の入場がなされる⁵⁹⁾。発掘調査によって、ヒッポ司教座の教会の洗礼堂が明らかになり、洗礼堂の部屋は二辺が正方形で、他の一辺は半円形であった⁶⁰⁾。洗礼堂の中央には八角形の洗礼槽があり、その内側には中に入るための三段の階段があった⁶¹⁾。実際の洗礼式の様子をアウグスティヌスは詳述していないが⁶²⁾、三つの質問に答えて三度水に浸されることを示唆しているので⁶³⁾、この形で行われたのだろう。

洗礼直後になされるのが「油注ぎ」である。油を注ぐという象徴的な行為によって恵みの効果が実現されるというのがアウグスティヌスの秘跡の定義であり、「油注ぎ」は志願者(competentes)がキリスト者(christianus)になることを意味するものだった⁶⁴⁾。洗礼を受けてキリスト者になった者たちは、復活祭の日曜日に初めての聖餐に与った。アウグスティヌスはその聖餐の意味についても説教した⁶⁵⁾。

以上がアウグスティヌスが示しているヒッポでの洗礼直後も含めての洗礼前の流れである。教会は決してオープンではなく厳格に閉じられていて、洗礼を受けてキリスト者になりたいと願う者は段階を踏んでいく必要があった。アウグスティヌスは洗礼を受けようとしている人がどのように呼ばれるか、段階によってその呼び方を使い分けている。それらをまとめると、このようになる。教会に来て間もない人は *rudis*（未教育者）と呼ばれる。これは現代で言うところの新来者や来会の頻度の少ない人と置き換えてもよいだろう。当時の教会では *rudis* が参加できる範囲はかなり限定的だったようである。*rudis* から洗礼に向けての段階に進みたい者は助祭のところに行き、手ほどきを受ける。その手ほどきを受け入れて次の段階へと進みたいと願う者は *catechumenus*（求道者）と呼ばれるようになり、聖餐は除外されるが聖書朗読や説教も含めた礼拝のかなりの部分の出席が許されるようになった。これは現代で言うところの洗礼を志した求道者と言えるだろう。このような *catechumenus* としての歩みが三年ほど続き、倫理的な講話も聴いて生活が整えられ、次の復活祭に向けての洗礼が認められるようになると *competentes*（志願者）とされ、「信条の伝達」や「主の祈りの講話」など、洗礼直前の特別なプログラムを受ける。これは現代で言うところの受洗日が定まり、試問会に臨んでいる者と言えるだろう。そして洗礼と油注ぎの儀式を経て、*christianus*（キリスト者）になるのである。

アウグスティヌスは『教えの手ほどき』の中で助祭が語るべき一連の話 (*narratio*) を完全な形で示しているので、その部分を担当した経験もあったと推測できるが、司教としての責任を負ったのが洗礼直前の「信条の伝達」と「主の祈りの講話」（また洗礼直後の聖餐に関する講話）であった。次節ではそれら二つをアウグスティヌスが伝道者としてどのように語ったのか、見ていきたい。

3. 「信条の伝達」と「主の祈りの講義」

前節で論じたように、アウグスティヌスが示しているヒッポでの受洗前の最

終教育として、「信条の伝達」と「主の祈りの講話」が行われていた。本節ではこれらの中でアウグスティヌスが何を語っていたのかを見ていこう。

ところで、アウグスティヌスが語った多様な「説教」が残されている。「説教」は彼の著作の3分の1ほどの分量にあたると言われている⁶⁶⁾。聖書の注解を除き、『詩編注解』（注解という名であるが説教として分類される）と『ヨハネによる福音書講解説教』と『ヨハネの手紙一講解説教』は別個独立したものとしてひとまとめにされ、それら以外の残りは単に『説教』(sermones)と呼ばれ、546篇のものが知られていたが⁶⁷⁾、さらに1989年以降に発見されて刊行された「ドルボ説教」の30篇が加えられた⁶⁸⁾。

アウグスティヌスは説教の務めをどう考えていたのだろうか。*Augustine Through the Ages: An Encyclopedia of Preaching* (説教)の項目に、アウグスティヌスが説教者としての務めをどう考えていたのか、以下の8点が挙げられている。「(1) 聖書の解釈と教え (2) 正しい信仰の弁護 (3) 善を教えること (4) 悪を教えないこと (5) 個々人を回心させるように努めること (6) 不注意な個々人を喚起すること (7) 無知な人々に何が起きているかを伝えること (8) 彼らに何を望みとすべきかを伝えること」⁶⁹⁾。アウグスティヌスはこれらのことを意識しながら「説教」を語っているが、「説教」には旧新約聖書の講解だけでなく、様々な教会歴にかかわる説教、聖人を記念しての説教、そして洗礼前の「信条の伝達」や「主の祈りの講話」など、幅広いものが含まれている⁷⁰⁾。本稿では「信条の伝達」と「主の祈りの講話」を考察していくが、アウグスティヌスは伝道者として洗礼直前の志願者に、上述の8点の要素を含めて語りかけていたのである。

<信条の伝達>

アウグスティヌスが「信条の伝達」で用いている信条には二種類のものがある。一つが「ミラノ信条」である。387年にアウグスティヌスはミラノの司教アンブロシウスから洗礼を授かった。その時に教えてもらった信条である。その「ミラノ信条」を用いて説教をしているのが『説教』213であり、時期と

しては410年のイースターの2週間前のものである⁷¹⁾。もう一つが「ヒッポ信条」であり、『説教』215にその講解が示されている。この説教がなされた年代については、391年や395年から425年まで幅広い意見があるが⁷²⁾、時期や状況に応じて、二つの信条をアウグスティヌスは使い分けていたのだろう。

本稿では『説教』213を中心に見ていこう。『神学』86号に日本語訳を掲載したのでそちらを参照していただきたいが、本稿で引用する場合はすべてそこからの引用である。

アウグスティヌスは冒頭のところで「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」(ローマ10:13)を引用する。これは「信条の伝達」における特徴であり、また続けてなされる「主の祈りの講話」における特徴でもある。後で触れるように、志願者は「主の名を呼ぶ」のであるが、まず名を呼ぶために、そのお方がどのようなお方であるかを知らなければならない。そのお方を知ることが「信条の伝達」によってなされ、実際に「主の名を呼ぶ」ことが「主の祈り」によってなされるのである。アウグスティヌスも「だから正しい順序は、まずあなたがたが信じ、その後で呼ぶことですから、今日あなたがたは信仰の信条 (symbolum) を受け取り、それをあなたがたのものにすることです」(213.1)と語っている。したがって、「信条の伝達」においても「主の祈りの講話」においても、ローマの信徒への手紙のこの前後の箇所が必ず引用されているのがアウグスティヌスの特徴である。

信条の講解が始まる前に、「信条 (symbolum) は信仰の基準 (regula fidei) を含んでいる要約であり、記憶に負担をかけることなく、心に教えることが意図されています。短い言葉で語られますが、そこから多くを得ることが出来ます」(213.2)と述べ、さらには「信条は〔分量は〕多くありませんが、〔内容は〕多いものです」(213.2)と述べられる。これは信条とは何かを言い表しているものであり、信条には救いに至る信仰の確信が語られているのだから、これからなされる信条講解を踏まえ、その意味をしっかりと自分のものにするようにと語られる。

この先、いよいよ信条の言葉を少しずつ区切りながら、講解がなされていく。

最初に父なる神の「私は全能の父なる神を信じます」(Credo in deum, patrem omnipotentem)の部分であるが、アウグスティヌスは「これをほんの一瞬で言うことができますが、どれほどの価値があることでしょうか」(213.2)と語り、「父」と「全能」についての詳細な講解を続けていく。

次に子なる神の部分である。「独り子」であることが父と「同じ本質(substantia)」(213.3)であると語られ、ニカイア信条のホモウシオス(同本質)が踏まえられた議論が展開されている。特に御子の受肉が強調され、「聖霊と処女マリアから生まれ」(qui natus est de spiritu sancto et virgine Maria)のところでは、「主キリストは肉をまとわれ、…自分になかったものを引き受け、あったものを失うことはなかった」(213.3)と語られ、神であったお方がまったく同じ人間となって私たちの全存在を引き受けたださったことによって、私たちの贖罪者(redemptor noster)となったださったと語る。十字架と復活の意義についてはこのように語る。

私たちが彼の受難を告白したら、復活をも告白しましょう。彼は受難において何をなされたのでしょうか？ 私たちに忍耐を教えてくださいましたのです。復活において何をなされたのでしょうか？ 私たちに何を望むべきかを示していただいたのです。前者は業(opus)、後者は報い(merces)です。つまり、受難においては業であり、復活においては報いなのです⁷³。

ここでの「望むべき」ものや「報い」については、はっきり述べられていないが、続くところの講解で明らかになる。「そこから来られ、生きている者と死んでいる者とを審かれます」(inde uenturus iudicaturus uiuos et mortuos)のところで、キリストが「審判者」(iudex)でもあるが、「救い主」(saluator)でもあり、「弁護者」(advocatus)でもあると語られる(213.6)。アウグスティヌスはキリストが「弁護者のままで審判者として来られる」と説き、それゆえにそれが「望むべき」ことであり、そのような大きな「報い」があると語るのである。

最後は聖霊なる神と教会の部分である。聖霊の説き明かしとしては、聖霊の単独の働きではなく、「三位一体が完成する」と語り、「三位一体の働きは切り離すことができない」と短く説かれる(213.7)。その反対に、教会とそれに付随する部分の説き明かしは長い。教会については「*公同教会 (ecclesia catholica)*」(213.8)と説かれ、教会はかつては「*娼婦 (meretrix)*」であったが、「わたしはあなたがたを純潔な処女として一人の夫と婚約させた」(Ⅱコリント11:2)とある通り、キリストによって処女(*virgo*)となったのだから、「処女のままであるべきです。誘惑者に気を付け、墮落しないようにしましょう」(213.8)と志願者たちを励ましている。「*罪の赦し (in remissionem peccatorum)*」について、二種類の罪の赦しが語られる。一つは「あなたがたはもうすぐ聖なる泉に至り、救いの洗礼で洗われ、再生の水で新しくなろうとされているのです。あなたがたはもはや罪がなくなり、浴槽から出てくるでしょう。過去にあなたがたを苦しめていたものは、すべて消し去られるのです」(213.9)という洗礼での罪の赦しである。もう一つは「しかし、私たちはこの世界で生きていくのですから、そこでは罪なく生きている者はいません。したがって、罪の赦しは聖なる洗礼の清めだけにあるのではなく、八日の後にあなたがたが受け取ろうとしている日々の祈りである主の祈りの中にもあるのです」(213.9)と語られている通り、主の祈りによる洗礼後の日々の罪の赦しである。志願者は一週間後に「主の祈りの講話」を聴こうとしている。その結びつきでこのように語られ、教会にこのような罪の赦しの賜物が与えられているのだから、信条の言葉で「*聖なる教会*」の直後に「*罪の赦し*」が加わっていると、アウグスティヌスは講解している。最後の項目として「*体の甦り (carnis resurrectionem)*」である。このことを「*全能の父なる神*」が成し遂げてくださると力強く語り(213.10)、信条の講解を閉じている。

最後は一週間後の「*信条の復唱*」に関してこのように触れて、「*信条の伝達*」を閉じている。

八日の後、あなたがたが今日手渡されたものを復唱しなければなりません

ん。あなたがたの準備が整うように、あなたがたを指導してくれる両親⁷⁴による手引きを開始していただきましょう。この場所での祝福の祈りのために、鶏の鳴く時刻にどのように目覚めたらよいか、あなたがたに教えてくれるでしょう⁷⁵。それでは、ここに示した信条（symbolum）を熱心に暗記することから始めましょう。しかし誰も動揺してそれを復唱することができない状態になってはいけません。安心してください、私たちはあなたがたの父なのですから。学校の先生のように棒や鞭を持っているわけではないのです。たとえ言葉を間違ふことがあっても、信仰において間違わないようにしてください⁷⁶。

<主の祈りの講話>

主の祈りの講話の史料は、『説教』56-59の4篇である。日本語訳は『アウグスティヌス著作集』21（共観福音書説教（1））に含まれ、マタイによる福音書の山上の説教の一連の中に入れられている。しかしこの4篇の説教は洗礼志願者のために洗礼直前という特定の状況で語られたものである。

4篇の説教の長短も様々であり、強調点も一様ではない。しかし共通しているのは冒頭の部分である。「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」（ローマ10:13）⁷⁷、あるいはその直後の「信じたことのない方を、どうして呼び求められよう」（ローマ10:14）⁷⁸が必ず引用されることである。理由は明確であり、アウグスティヌスは以下のように述べる。「あなたがたは、初めに主の祈りを受けいれて、その後に信条を受けいれるのではなく、初めに、何を信ずるべきかが知られる信条を受けいれ、然る後に、誰を呼び求めるべきかを知る主の祈りを受けいれるべきであります」⁷⁹。「あなたがたは信条を反復朗唱しておりますが、その中には信仰の要諦が簡潔に含まれております。…神がどのように信じられなければならないか、あなたがたは聴き、理解し、くりかえし朗唱しておられるので、今日は神がどのように呼び求められなければならないかを聴いてください」⁸⁰。したがって、順番としてはまず信条、次いで主の祈りである。洗礼の二週間前に「信条の伝達」がなされ、その一週間後、つまり洗礼の一週

間前に「主の祈りの講話」がなされ、アウグスティヌスはこの二つを司教として担当していた。

さて、「主の祈りの講話」についても指摘しなければならない事柄がたくさんあるが、ここでは二点に触れたい。一つは主の祈りの五番目の願いである「罪の赦し」に関して、もう一つは四番目の願いである「糧」に関してである。

一つ目の「罪の赦し」は、主の祈りの講話の中でアウグスティヌスが最も力を入れて語っている事柄である。『説教』57では他に比べると短いものの（『説教』59は全体的にコンパクトである）、『説教』56と58では他の願いに比べると異常な長さである。どういうところに力を入れているのか。アウグスティヌスの言葉を引用する。

洗礼を受けてこの世に生き続けている人々は、難破こそまぬがれていますが、船底にたまる水あかをくみ出さなければならないといった、そうした何かを死の弱さのために、自分の身にひきよせて生きているのです。もし、そうした水あかをくみ出さないならば、少しずつ水が入ってきて船全体に浸水し沈没してしまふであります。ですからこの祈りを捧げることは、水あかをくみ出すことなのであります⁸¹。

アウグスティヌスは船から水をくみ出すイメージを用いて語っている。つまり、洗礼を受けることによって船はもはや難破することはなくなった。しかし日々犯してしまう罪によって船に水が入り込んでしまう。その水をくみ出さなければならない。その行為が主の祈りの「罪の赦し」の願いを唱えることであり、洗礼後の罪は主の祈りによって赦されるという考えである。

さらにアウグスティヌスはこのように語る。

今あなたがたは洗礼を授けられようとしております。…あなたがたが生まれる時に、原罪とともにアダムに従って両親からひきうけた罪のみならず…生きていることによってあなたが付け加えた罪、例えば言葉によって、

行いによって、心の思いによって加えた罪、そうしたすべての罪が赦されたことをしっかり確かめなさい。そうすれば、あなたがたはあなたがたの主の御前から出るように、すべての負い目からの赦しを保証されて洗礼水から出ることであります⁸²⁾。

これは洗礼の時の罪の赦しであり、原罪も洗礼前に犯した罪もすべて洗い流される。しかしその後の罪に関してはこのように続けて語られる。

すでにわたしが述べたようなそうした日毎に重ねる罪のゆえに、いわば日毎の浄化として、「わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように、わたしたちの負い目を赦してください」と唱えることがあなたがたにとって必要であります⁸³⁾。

これとまったく同じことが「主の祈りの講話」の4篇の説教で共通しており、アウグスティヌスが最も強調したかったことである⁸⁴⁾。つまり、主の祈りは「罪の赦し」に関しても日毎の祈りだということである。

二つ目は四番目の願いである「糧」に関してである。アウグスティヌスは「日毎の糧」には「二様の意味」があると言う。

たしかに日毎の糧に対するこうした願いは二様の意味で理解されるべきであります。すなわち、肉体的生のために必要な糧として、他は霊的滋養にとって必要な糧としてであります。肉の食物は日毎の糧として必要であります。それがなければわたしたちは生きることができないからです。…信仰の人たちは霊的な栄養を…聖餐はわたしたちの日毎の糧なのであります。…さらに、わたしがあなたがたのために取り扱っている事柄が日毎の糧であり、教会においてあなたがたが毎日聴いている〔聖書〕朗読が日毎の糧であり、あなたがたが聴きかつ歌っている讚美歌が日毎の糧なのであります⁸⁵⁾。

ここで明確に語られているように、他の説教でもアウグスティヌスは糧のことを、日毎の肉的な食料のみならず、聖餐、説教、聖書朗読、讚美歌などの霊的な糧としても捉えている。例えば、他の説教では「まさに胃が食料を飢え求めるように、精神もまたそうした糧を求めております。このように、わたしたちはそうした糧を単純に求め、この世においてわたしたちの魂と肉体にとりて欠くことのできない必要なものは何でも『日毎の糧』の中に含まれているのであります」⁸⁶⁾と語られたり、「祭壇から受け取ろうとしているあの日毎の〔聖餐の〕糧…神の言もまた糧であります。それは胃袋を満たす糧ではありませんが、精神の糧であります」⁸⁷⁾と語られている。

一つ目は「罪の赦し」に関する日毎の祈りであったが、二つ目は「日毎の糧」に関する祈りである。主の祈りは洗礼後の罪の赦しを支える祈りであるのみならず、洗礼後の説教を聴き、讚美歌を歌い、聖餐に与る教会生活を支える日毎の祈りである。「信条の伝達」と「主の祈りの講話」という順序と連続性の中で、アウグスティヌスは神学的な意味を込めて志願者に語ったのである。

4. おわりに

本稿ではアウグスティヌスが司教の務めを行っていたヒッポでの受洗に至るまでのプロセスと、アウグスティヌスが特に責任を負っていた「信条の伝達」と「主の祈りの講話」で何を語ってきたのかを明らかにしてきた。「信条の伝達」と「主の祈りの講話」の一連の講話に関しては、ローマの信徒への手紙第10章に基づく連続性が見られ、「心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われる」(ローマ10:10)が「信条の伝達」と「信条の復唱」の実践によってなされ、さらには「主の名を呼び求める」(ローマ10:13)ことが主の祈りによってなされることを、アウグスティヌスは伝道者として強調して語っていた。

神学的な強調点としては、特に「罪の赦し」が挙げられる。信条を受け入れて告白して洗礼を受けると洗礼前の罪が原罪も含めて赦される。しかしその後

犯した罪に関しては主の祈りの五番目の願いを日毎に祈り続けることによって赦される。このような考えはカトリック神学として、その後の告解の sacrament によって赦されるといふ考えにつながっていき、プロテスタント神学とは相容れないと言わざるを得ないだろう。プロテスタントの改革者たちは信仰問答などに信条と主の祈り（と十戒）を入れて信仰教育を行っていったが、私たちもその流れと神学を確認して、求道者に何を語りかけるべきか、今一度、確認する必要があるだろう。

本稿の冒頭のところで見てきたように、古代教会において、教会外の至るところで信徒たちも「伝道者」となって伝道がなされたが、受洗に際しては助祭に始まり司教に至るまでの聖職者が責任を負い、教会の敷居は非常に高かったと言える。今日において、教会の敷居を低くすること、あるいは撤廃することが叫ばれ、その取り組みもなされているが、少なくとも洗礼（もちろん聖餐も）に関して、求道者がキリスト者になるにあたって越えて行かなければならない敷居とは何なのか、教会では何を信じ、何を告白し、どのようなお方に呼びかけているのか、それらのことを踏まえた上で、伝道者が求道者にどのように語りかけていくのか、大いに問われているだろう。

(ほんじょう・こうた)

注

- 1) 『神学』86号（2024年12月刊行）の主題は「伝道者論」であり、2025年1月の教職セミナーのテーマは「福音の担い手：伝道者論をめぐって」であり、本論文は教職セミナーでの発題内容である。
- 2) J. ゴンザレス『キリスト教史（上巻）』（石田学訳、新教出版社、2002年）p.114.
- 3) A. リチャードソン、J. ボウデン編『キリスト教神学事典』（古屋安雄監修、佐柳文男訳、教文館、1995年）p.449.
- 4) B. ボット『聖ヒッポリュトスの使徒伝承B. ボットの批判版による初訳』（土屋吉正訳、燦葉出版社、1983年）に日本語訳がある。この先の引用はすべてこの日本語訳からの引用である。

- 5) 『使徒伝承』 15.
- 6) 『使徒伝承』 16.
- 7) J.A.ユングマン『古代キリスト教典礼史』（石井祥裕訳、平凡社、1997年）p.91を参照。道徳的な教えに関しては、オリゲネス『民数記講話』 27.1（『中世思想原典集成』 p.597）。
- 8) 『使徒伝承』 17.
- 9) ユングマン『古代キリスト教典礼史』 p.92.
- 10) ユングマン『古代キリスト教典礼史』 p.92.
- 11) テルトゥリアヌス『洗礼について』 19.2-3（佐藤吉昭訳『中世思想原典集成』 4、p.66）。
- 12) ユングマン『古代キリスト教典礼史』 p.111.
- 13) 『使徒伝承』 20.
- 14) 『使徒伝承』 21.
- 15) 『使徒伝承』 21.
- 16) この議論は20世紀中頃から論じられ、第一人者の一人であるBradshawは「場所の起源や著者性については疑義がある。大多数の学者はこれがローマに起源があり、ヒッポリュトスが著者であると支持してきたが、しかしこれはまったく確実なことではない」（p.81）と問題提起し、近年の様々な学者の研究成果を紹介しながら、「かなり異なる地理的場所から生じ、おそらく2世紀中頃から4世紀中頃にかけての異なる歴史的時期から生じた様々な史料の素材から成る集合体であると我々は判断する」（p.83）との結論に達している（Paul F. Bradshaw, *The Search for the Origins of Christian Worship*: Oxford University Press (2002)）。聖書注解書*Hermeneia*シリーズの中に『使徒伝承』（*The Apostolic Tradition*）があり、Bradshawらが執筆しているが、その序文のところにこのようにある：「この著作はヒッポリュトスの著作でも他の個人の著作でもないという我々の主張を展開することにした。その代わりに、私たちは、この文書が多様な出自を持ち、ある期間にわたって編集された、多くの層や筋からなる複合文書であり、それゆえ特定のキリスト教共同体の実践を代表するものではないと信じている」（Bradshaw, Paul F. Johnson, Maxwell E. Johnson, L. Edward Phillips, *The Apostolic Tradition: A Commentary. Hermeneia*, Minneapolis: Fortress Press(2002)）。さらには*The Oxford Handbook of Early Christian Studies*にはこれらの議論をまとめ、（ローマのものだけでなく）「アレクサンドリアやシリアのものが混ざっている」との批判が展開されている（S. A. Harvey (ed.), D. G. Hunter (ed.), *The Oxford*

- Handbook of Early Christian Studies*: Oxford University Press (2008), p. 430)。このように20世紀中頃から疑義を投げかけられ、21世紀になってからは、ヒッポリュトス『使徒伝承』は未だ失われているというのが定説になっている。
- 17) 『中世思想原典集成』第2巻(平凡社、1992年) p.142.
 - 18) 『古代教会の説教』に日本語訳が収録されている。
 - 19) この部分の日本語訳はない。ギリシア語原文は、F. L. Cross ed., *Cyril of Jerusalem's lectures on the Christian sacraments : the Procatechesis and the five mystagogical Catecheses*, S.P.C.K., 1951に収められている。英訳は、L. P. McCauley, A. A. Stephenson trans., *The works of Saint Cyril of Jerusalem*, vol. 1, vol. 2., Catholic University of America Press, 1969など、複数のものがある。
 - 20) 『中世思想原典集成』第2巻に『洗礼志願者のための秘儀教話』として収録されている。
 - 21) エルサレムのキュリロス『教理講話』序.1.
 - 22) エルサレムのキュリロス『教理講話』序.6.
 - 23) 詳細は、拙稿「古代教会における『聖書的語りの共同体』」(『伝道と神学』13号、東京神学大学総合研究所、2023年) pp.47-65を参照。
 - 24) Everett Ferguson, *Baptism in the Early Church History, Theology, and Liturgy in the First Five Centuries*, Grand Rapid, MI: Eerdmans Pub. Co., 2009, p.778.
 - 25) Allan D. Fitzgerald ed., *Augustine Through the Ages: An Encyclopedia*, Grand Rapids: Eerdmans, 1999, p.85.
 - 26) 拙稿「伝道者アウグスティヌス—『説教』213における「信条の伝達」、その翻訳」(『神学』86号、東京神学大学神学会、2024年) pp.66-83.
 - 27) 二次史料に関しては、以下のものを参照した。Allan D. Fitzgerald ed., *Augustine Through the Ages: An Encyclopedia*, Grand Rapids: Eerdmans (1999) のBaptism (pp.84-91) の中のThe Easter Vigil in Hippo (ヒッポにおける復活徹夜祭)の項目 (pp.85-87) およびCatechumens, Catechumenateの項目 (pp.145-149)。岩村清太『アウグスティヌスにおける教育』(創文社、2001年)の「第五章 聖職者アウグスティヌスによる入信者の教育」(pp.78-117)。Everett Ferguson, *Baptism in the Early Church History, Theology, and Liturgy in the First Five Centuries*, Grand Rapid, MI: Eerdmans Pub. Co. (2009)のNorth Africa: Augustine of Hippoという節 (pp.770-816)。W. Kinzig, *A History of Early Christian Creeds*, Berlin/Boston: De Gruyter (2024)の11.1.1 The development of the *Traditio* and *Redditio symboli* (pp.485-502)のアウグスティヌスに関わる記述。

- 28) アウグスティヌス『教えの手ほどき』（熊谷賢二訳、キリスト教古典叢書4、創文社、1964年）。
- 29) *Augustine Through the Ages: An Encyclopedia*, p.144.
- 30) アウグスティヌス『教えの手ほどき』 p.1.
- 31) 詳細は、拙稿「古代教会における『聖書的語りの共同体』」（『伝道と神学』No.13、東京神学大学総合研究所、2023年） pp.47-65を参照。
- 32) アウグスティヌス『教えの手ほどき』 2.3.
- 33) アウグスティヌス『教えの手ほどき』 2.4.
- 34) 岩村清太『アウグスティヌスにおける教育』 p.82.
- 35) テルトゥリアヌス『洗礼について』 17.1（佐藤吉昭訳『中世思想原典集成』4、平凡社、1999年）。
- 36) 岩村清太『アウグスティヌスの教育』 p.83.
- 37) アウグスティヌス『教えの手ほどき』 26.50.
- 38) 岩村清太『アウグスティヌスの教育』 pp.88f.
- 39) 岩村清太『アウグスティヌスの教育』 p.89.
- 40) E. Ferguson, *Baptism in the Early Church History*, p.780.
- 41) 『説教』 132.1.
- 42) 『説教』 49.8には「見よ、説教後に洗礼志願者の退出があり（*Ecce post sermonem fit missa catechuminis*）」とあり、また、『書簡』 126.5には「わたしたちは洗礼志願者を退去させていたので（*Dimisimus catechumenos*）」（金子晴勇訳『アウグスティヌス著作集』別巻Ⅱ（教文館、2013年） p.19）とある。
- 43) 岩村清太『アウグスティヌスの教育』 p.90.
- 44) 『新書簡』 2（金子晴勇訳『アウグスティヌス著作集』別巻Ⅱ）を参照。「あなたは新生の sacrament を受けることを拒絶している」（2.3）とアウグスティヌスは述べ、「そんなにも重い重荷はまだ弱く強化されていない人々によっては支えることができない」（2.4）とあなたが弁解しているのは間違っている、と指摘している。アウグスティヌスはそのような「強化」が「第一は新生によって獲得され、第二は義に対する愛によって獲得されます」（2.3）と述べ、なかなか洗礼を受けようとしないう求道者に早く決断するように促している。
- 45) アウグスティヌス『信仰と行為』を参照（出村和彦訳『アウグスティヌス著作集』 27巻（教文館、2003年））。この著作ではそのタイトルの通り、信仰と行為（行い）の問題を取り上げているもので、「洗礼を認めるのは正しいかどうか…もし洗礼式に先立つ数日間に、節制を守ることを公然と否定し、…洗礼が認め

られるべきでないのは明らかです」(6.8)、「その恥ずべき行いを続けながら、しかもそれを公衆の面前であらわにしている場合にはその者たちに洗礼が認められるべきではない…もし死に至る行いを悔い改めないならば、洗礼を受けることは許可されない」(18.33)など、アウグスティヌスは洗礼前(もちろん洗礼後も)の倫理を述べ、ふさわしくない場合は洗礼を受けるべきではないと主張している。

- 46) 岩村清太『アウグスティヌスの教育』p.91.
- 47) E. Ferguson, *Baptism in the Early Church History*, p.781.
- 48) 『説教』227.
- 49) E. Ferguson, *Baptism in the Early Church History*, p.781.
- 50) 教理的なこととしては「信条の伝達」に代表される。また、「洗礼志願者の段階にある者にキリストの名にふさわしい生活の仕方が説明されるということが教会において正しいやり方」(『信仰と行為』6.9)であるとアウグスティヌスは述べ、道徳的な教えもこの期間に説かれていった。
- 51) 『告白』8.2.5に示されているもので、ローマで有名な弁論術の教師であったウィクトリヌスが、ローマ教会で356か357年に受洗した時の出来事である。アウグスティヌスは直接それを見たわけではないが、聞いた話を以下のように書き記している。「ついにウィクトリヌスは信仰を告白すべきときがきた。ローマでは、あなたの恵みを受けようとする人びとは一段と高いところから信者たちの面前で、暗記したきまり文句で、信仰告白をする習慣である。シンプリキアヌスの話によると、ウィクトリヌスはその文句をもっと内輪で述べるように、長老たちから勧告されていた。こういうことも、恥じらいのためにどぎまぎするかもしれない人びとには許されていた。しかし、ウィクトリヌスは長老たちの勧告を斥けて、自分の救いを聖徒の面前で述べようとした。かれが弁論術の教師として教えていたものは救いではなかったが、かれは救いを公衆の面前で述べたのである。かれは自分のことばを述べるとき、狂った群衆を恐れなかったのであるから、あなたの御言を述べるときに、柔和な会衆を恐れなければならぬわけがあるか。こうして、かれが告白するために高い所にのぼったとき、会衆はみなかれを知っていたから、歓呼の声をあげて、かれの名をささやきあつた。そこにかれを知らないものが一人でもいたであろうか。それで喜び合うみなの中から、「ウィクトリヌス、ウィクトリヌス」というささやきが聞こえた。人びとはかれを見ると、たちまち歓声をあげたが、またたちまち静まりかえって、かれの告白を聞こうとした。ウィクトリヌスは、立派な確信をもって、真実の

信仰を告白し、それを聞いた会衆はみなかれのことばを自分の心中に取り入れようと思った。そしてじっさい、人びとは愛と喜びをもってそれを心中に取り入れたのである。この愛と喜びは、それを取り入れる手なのであった」(服部英次郎訳)。

- 52) W. Kinzig, *A History of Early Christian Creeds*, p.486.
- 53) W. Kinzig, *A History of Early Christian Creeds*, p.487.
- 54) 『書簡』 54.7.10.
- 55) 岩村清太『アウグスティヌスの教育』 pp101f.
- 56) 『説教』 215.1.
- 57) 『説教』 215.1, 216.6.
- 58) E. Furguson, *Baptism in the Early Church History*, p.784.
- 59) 『詩編注解』 41を参照 (谷隆一郎他訳『アウグスティヌス著作集』 18/ II、2006年)。「まことに、洗礼志願者ではあるが、聖なる水浴〔洗礼〕の恵みへと急ぐ者たちの声であると理解されても悪くはない。それゆえ、「鹿が水の流れる泉を慕い喘ぐように」彼らが罪の赦しの泉を熱望するために…」(41.1) というような表現が至るところに見られ、受洗志願者が洗礼の水を求めるモチーフで説かれている。
- 60) E. Furguson, *Baptism in the Early Church History*, p.785.
- 61) 岩村清太『アウグスティヌスの教育』 p.104.
- 62) E. Furguson, *Baptism in the Early Church History*, p.786.
- 63) 『説教』 213.7, 294.12など。
- 64) 岩村清太『アウグスティヌスの教育』 pp.105f.
- 65) 『説教』 227, 228, 229.
- 66) F. LeMoine, C. Kleinhenz, *Saint Augustine the Bishop: A Book of Essays*, New York: Garland Publishing, 1994, p.13.
- 67) 友廣純「アウグスティヌスの説教をめぐる」(『史苑』 62-2、2002年、立教大学史学会) p.103.
- 68) 友廣純「アウグスティヌスの説教をめぐる」 p.104.
- 69) *Augustine Through the Ages: An Encyclopedia*, p.675.
- 70) 小高毅編『古代教会の説教』(教文館、2012年) pp.16ffでは、一般的な古代の説教の類型を五つに分類している (1. 聖書講話、2. 要理教育講話 (洗礼志願者に対する講話)、3. 典礼暦年に沿った説教、4. ある個人を称賛する説教、5. 時事的な問題に関する説教)。アウグスティヌスの説教の分類も概ねこれに沿っ

たものとなっている。

- 71) *Augustine Through the Ages: An Encyclopedia*, p.781.
- 72) J. E. Rotelle (ed.), E. Hill (translation and notes), *The Works of Saint Augustine: A Translation for the 21st Century*, p.165の注1を参照。
- 73) 『説教』 213.5.
- 74) ラテン語はParentesである。もちろん実の両親の場合もあったかもしれないが、受洗志願者には信仰の指導をしてくれるParentesがつけられた。これは複数形であり、二人の親だけでなく、さらに広い範囲が考えられていた可能性もあるだろう。英訳をしているE. Hillは、この後にアウグスティヌスが語っている「安心してください、私たちはあなたがたの父なのですから」の「私たち」を「すべての信者たち」のことだと指摘している。
- 75) これが何を意味するのかはよく分からない。イースター当日の洗礼に至るまでの霊的生活の指導の一部分なのか、イースター前夜の何らかの儀式のことなのか不明。
- 76) 『説教』 213.11.
- 77) 『説教』 56.1, 57.1.
- 78) 『説教』 58.1, 59.1.
- 79) 『説教』 56.1.
- 80) 『説教』 58.1.
- 81) 『説教』 56.11.
- 82) 『説教』 56.13.
- 83) 『説教』 56.14.
- 84) 例えば『説教』 58.6では、このように語られる。「罪の赦しは〔二種類あって〕、ただ一回だけ与えられる罪の赦しと、日ごとに与えられる罪の赦しとがあつて両者は異なるのです。すなわち、一つは、聖なる洗礼のときに与えられる一回限りの罪の赦しであり、他は、わたしたちがこの世に生きている間、主の祈りによって与えられる罪の赦しであります」。
- 85) 『説教』 57.7.
- 86) 『説教』 58.6.
- 87) 『説教』 59.6.